青春淫奏曲

黒百合散る

作　黒見メイ

青春淫奏曲　黒百合散る

作　黒見メイ

前書き

・この物語はフィクションです
・盗撮、盗聴は犯罪、同意のない性行為は犯罪です
・女性を軽視する発言がありますが、女性を大事に扱いましょう
・童貞を見下す描写がありますが、現実では童貞には優しくしましょう
・追加シナリオにて前日譚のユリの日常を収録していますが、読む順番は先でも後でもどちらでも大丈夫です。ネタバレを含む内容では御座いません

目次

第１章　黒百合の堕とし方
第２章　思い出の初体験
第３章　恥辱の撮影会
第４章　化学の３P教室
第５章　祝・映像部童貞卒業乱行
第６章　第三の穴、開門
第７章　黒百合散る
エピローグ

０・５章　ユリの日常
EX１章　日野先生の課外授業
おまけページ

第1章　黒百合の堕とし方

桜並木も次第に葉が枯れ始め、正門までの道のりから華やかさは一切感じられない。入学当初はカメラを向けられ話題の中心だったあの桜達も枯れてしまえば見向きもされない。今の俺と同様に。

俺、大山康太は閃桜高等学校に通う高校二年生。単刀直入に言ってしまえば高校デビューに失敗し、開花できなかった桜だ。一年生の時のクラスで友達作りができなかった俺は、クラスでは大人しい陰キャ扱い。会話といえばプリントを配る時と委員会の必要事項の会話。授業中に当てられた時だけだ。

こんな俺のどこからどう見ても灰色確定の高校生活を加速させる要因がもう一つある。それは部活動だ。

本当は運動部に入って自分を変えたいと思い、卓球部に体験入部をした。だがこれが地獄の始まりであったのだ。

卓球は子供の頃に近所の児童館で友達と何時間も遊んでいて、部活経験こそ無いもののカットをかけたり、それなりに早いスマッシュを打てたりと、卓球をかじった程度の奴等には負けない自信があった。

だが高校の部活というだけあって練習はハードだった。走り込み、体力作りだけで一時間。一年生は最初の一ヶ月はラケットにすら触れない。

体験入部の一年生は基礎練習を十分間だけで、後は説明を受けたり各々休憩したりと行った流れだったが、俺はその時点で身体がばてて、足が震えていた。

それもそうだ。卓球をがむしゃらに遊んでいたのは小学校四年生まで。中学は帰宅部で家でパソコン、ゲームざんまい。運動といえばエロゲーで自慰行為をする際の手の上下運動くらい。

ただグダグダ言っててもしょうがない。俺は運動部に入り自分を変えなければいけない。あわよくば失敗したスタートダッシュをやり直さなければいけない。

そうこの時点で俺は最高に力んでいたのだ。

体験入部の一年生は三十分程、試合形式のラリーをする事にった。何とか印象に残ろう、先輩に可愛がられる存在になろう、俺の頭にはそんな思考しか無かった。

そして周りが軽いラリーをする中、カットサーブ、スマッシュなど自分のもてる技を駆使してアピールした。

俺は卓球の有名選手の如く、声を張り上げてスマッシュを放った。それは他の一年生に卓球を教えていた二年の先輩の目に思いきり命中。ゴリラのような見た目の二年の先輩は耳をつん裂くような雄叫びを上げて、ボールを打った犯人を探した。

俺は萎縮し、体の穴という穴から汗を吹き出した。
その光景でゴリラ先輩は俺が犯人だと断定し、肩を力強く掴み説教を始めた。
それからは意識が朦朧として覚えていない。
起きた時には保健室のベッドの上で、もう卓球部には入部できないという事実だけが残った。その後、俺は映像部に入部した。そこで話せるようになった同級生は細身の眼鏡で出っ歯の映像オタク、油ぎったメタボ体系のアニオタ。そして普通体型の俺という、さながらズッコケ三人組さながらの交友関係ができたというわけだ。
俺の青春は最悪のスタートを切り、いまだに光明は見えない……。
だが諦めるわけにはいかないのだ。
なぜなら俺には大きな野望があるから。
閃桜高等学校は生徒数千人を超える、所謂マンモス校というやつで、校舎も一際大きく、全国大会常連の部活が幾つも存在する。

中でも全国大会常連なのが陸上部。陸上自体に大した興味は無い。だが陸上部には興味がある。

なぜなら一年時からの同級生であり、クラスのマドンナ的存在の黒沢ユリが在籍しているからだ。

黒沢ユリ――透き通ったロングヘアー、大きく鋭い瞳、華奢な身体には不釣り合いの胸の膨らみ。ツンと高い鼻はクールな彼女の気品の高さを伺わせる。モデルのような長い脚は程よく筋肉質で見るだけで欲情してしまう。

まるでモデルと見間違うような女子高生、黒沢ユリは同級生の誰もが憧れる女神なのである。

そんな彼女と映像部のズッコケトリオと言われる俺では天と地の差。美女と野獣どころの騒ぎではない。

だがそんな事は関係ない。俺の野望は彼女と付き合う事なのだから……。

今はまだ遠い存在でも、これから少しずつステップアップすれば、あり得ない話ではない。そして神はまだ俺を見放してはいない。なぜなら二年連続で俺とユリを同じクラスにしたのだから。

神頼みだけで何とかなると思う程、甘くはないい。密かに彼女の情報を集めているのだ。

実家暮らしで家族は四人、父、母、そして大学生の兄がいる。ユリが妹なんて羨ましい限りである。

部活は陸上部で去年は新人戦で好成績を納め、長距離では一年生ながら団体のメンバーに選ばれている。また噂によれば軽いモデル活動をしているとの事だ。

さすがはユリである。

身長161センチ、体重42キロ。バストは推定だがDカップはあると思われる。

これが俺の集めた情報だ。

そして彼氏についてだが……。

入学初日、彼女はいきなり同級生に告白された。しかしどちらも断り、通算で9回の告白をこれまでに断っている。俺からの告白を待っているのか、他に彼氏がいるのか……。

それからユリは学校で高嶺の花的な存在として扱われ、男子は殆ど彼女と喋れずにいる。既に彼氏がいるかどうかの問題だが、恐らくはいない。女子との会話で聞き耳を立てているがそのような話を聞いた事はないし、ユリが男と二人でいるのを見たという噂も聞いていない。

よって彼女はフリーである。

つまり俺にはまだチャンスがあるのだ。

放課後、俺は部活までの空き時間、ぼっとグラウンドを眺める。

これはいつもの日課で、窓から練習中の黒沢ユリが拝めるからだ。数少ないユリとの時間、少しでも彼女を眼光に焼き付けなければ。

この後、不細工な二人と会うのだから少しでも目の保養をしなければ。
ユリは軽いランニングで汗を流し、水分補給をしている。まじまじと見ていると喉の音まで聞こえてきそうで、高鳴りを覚える。
もっと近くにいられれば、音だけじゃない、綺麗な髪の匂いも、汗の滴りも、息遣いまで全て俺のものにできるのに……。
妄想に浸った俺の耳に、チャイムの音が響く。
やばい。
部活開始のチャイムだ。
慌ててスクールバックを取り、駆け足で教室を後にした。あんな部活でも今の俺の唯一の居場所だ。あまり印象は悪くしたくない
映像部の教室に下世話な笑い声が響く。
「いひひ、本当に大山はバカですねぇ」

細身眼鏡出っ歯こと細川は唾を飛ばしながら、馬鹿にしたような笑い声を上げた。

「そんなに言わなくてもいいだろ」

少しでも笑い話になればと思い、黒沢ユリを眺めていたら遅刻したという話をしたらこれだ。細川の性格がお世辞にも良いとは言えない事は分かっていたが、ここまで馬鹿にされるとは想定以上だ。

「まあまあ二人共、落ち着いてよ」

おっとりとした口調で喋るのは油メタボアニオタこと林田だ。

喋り方の如く、林田はおっとりとした性格で心優しい人間なのだが、優柔不断でイライラさせられる事が多い。

映像部に割り当てられた教室には今は俺達三人しかいない。というのも夏の映像コンテストに向けてグループを作り、各々で映像を完成させるので、他の部員

は出払っているのだ。三年生は本気の映画作りのためロケに出ている。一年生はやる気の無い生徒が多く、部活という程でほっつき歩いているという噂だ。

まあ教室に残って駄弁っている俺達も真面目に部活に取り組んでいるとはいえないが。

笑い終えた細川は眼鏡をきらりと光らせた。

「大山は本当に黒沢ユリと付き合う気でいるんですかぁ」

俺は淀みなく答える。

「当たり前だろ」

彼女と付き合わなければ今までの俺の高校生活、いやこれからの人生も真っ暗だ。その為なら何だってしてやる。

「現実を見た方がいいですよ。ボク達はアンダーグラウンドの人間で、黒沢ユリはいわばテレビの中の有名人。触れるどころか、話す事すら無理ってもんですよぉ」

馬鹿にしたような口調はいつもの事だ。だけど俺の野望を、夢を、馬鹿にした事は許せない。

「んなのやってみないと分からないだろ」

声を荒げて俺は反論した。

俺と細川の喧嘩に林田が目の端で狼狽えている。だが関係ない。譲れないものは譲らない。

「じゃあ付き合うプランはあるんですかぁ」

顎を突き出し、細川は煽るように言う。

「ぷ、プラン、それは……」

言い淀む。何度も話しかけようと試みては諦め、学校関係で少し話した時も緊張で頭が真っ白だった。

その隙を見逃さず、細川は猛追を始める。

「ほれみたことか。無計画、あまいあまいですよぉ」

「うるせぇな、何の努力もしてないやつより可能性はあるんだよ」
「だから何の努力もしてないって言ってるんですよぉ」
ヒートアップする俺達の会話を聞いて、林田が仲裁に入る。
「大山くんも細川もやめなよ。ここで喧嘩しても何にもなんないよ。ほら、部活動しようよ。ね」
林田の慌てっぷりを見て、冷静さを取り戻し、息を吐き出す。
「それもそうだな。悪りぃ」
しかし細川はまだ不敵な笑みをやめない。
「何だよ細川。まだ文句あるのかよ」
細川は自前のノートパソコンを弄り出し、ふんと鼻をならした。
「いいですか、黒沢ユリはテレビの向こうの存在。会話も触れる事もできない。セックスなんてもっての他。だけど唯一、ボク達みたいなのにも許されている事があるんですよ」

意気揚々と話しだす細川を見て、俺と林田は同時に首を傾げた。
「それはね。見る事ですよ」
何を言い出すかと思えば……。
「そんなのいつも見てるだろ。今日だって俺はユリを見て遅れたんだぜ」
「あまいあまいですよぉ。見るってのはこういう事ですよ」
細川はノートパソコンを俺と林田の方に向けた。
そこには閃桜高等学校の制服を着た女生徒の写真がいくつもあった。普段の会話シーンから下着が見えているもの。中には盗撮と思わしき更衣室での着替えの写真まで。
「お前これどうしたんだよ」
よく見れば同じクラスの女の子の写真もある。もしかしたらここに黒沢ユリのものも…。

「ボク達は映像を撮る部活ですよ。写真を撮るのなんて基本。ただの部活動の一環ですよ」
「でもこれは盗撮、犯罪だろ……」
犯罪だと指摘しているはずなのに、俺の視線はユリを探す事で右往左往している。
「じゃあ大山は見なければいいですよ。林田と今晩たっぷり楽しむんでね」
そう言った細川はばたんとノートパソコンを閉じた。
放心する俺を無視して、細川は林田の肩を叩く。
「林田は見るよなぁ。お前のクラスの子の下着姿も撮ってるよ。どれを今晩のおかずにするですか」
ゲスな声を響かせる細川。
林田は狼狽しているが、制服のスボンはしっかりとテントを張っている。身体は正直だ。

そして俺のイチモツも同様に……。
もしかしたらあそこにユリの写真があるかもしれない。今は法外な方法でしか入手できない。ならば悪魔にでも魂を売るべきじゃないのか……。
でも俺はユリと純粋な恋愛をしたいんじゃないのかーー。
俺は……。

「悪かった細川。俺が馬鹿だったよ。もしユリの写真があるなら、俺にも見せてくれ、頼むこの通りだ」
俺は勢いよく頭を下げて、手を合わせてお願いした。
細川が笑い声をあげた。
「最初から素直になればいいんですよぉ。大山もこっち側の人間なんですからねぇ」

細川は手慣れた仕草でマウスを動かし、黒沢ユリと名前のついたフォルダをダブルクリックした。

「女神は勿論、特別扱いですよ」

そこには他の生徒の枚数とは比べ物にならない量の黒沢ユリの写真があった。教室で座っているユリ、友達と談笑しているユリ、ジャージ姿のユリ、部活で汗を流しているユリ。どれも魅力的で欲情してしまうようなものばかりだ。映像部というだけあって盗撮ながらもユリの姿がはっきりと写っている。小型カメラを使用しているらしく、少々画質は粗いものの、ユリの魅力は十分に引き出されている。

しかし俺がユリにぞっこんなのを良いことに最初はユリのいないフォルダを見せるなんて相変わらず、性格の悪い事だ。

まあこの写真でチャラにしてやるか。

「さあて今日はみんなでユリを使って抜くですか」

細川はゲスな笑いを浮かべる。
「お前なぁ……ユリはそういうんじゃないの」
ユリはそういう性的な対象じゃないんだ。高貴で女神のような存在で……。だから性欲の吐口にする相手じゃないんだ。
「そう思ってるのは大山だけかもしれないよ」
またしても細川は不敵に笑う。
なんだ。まだ何か隠し球があるとでもいうのだろうか。既に俺のイチモツはパンパンだ。
「部活動をしていると中に体操着とか着て中々、良いのが撮れないんだけどね。この前の中間テストの時に良いのがやっと撮れたんだよ。ああ、あの時は興奮したですなぁ」
今まで黙って見ていた林田が鼻息を荒くした。

「え、なに、何が撮れたの。ユリちゃんのどんなのが撮れたの。見せてよ細川くん」

興奮し鼻息が漏れ、いつも以上に林田の油が噴出している。

「仕方ないですねぇ。部活仲間のお前等二人だけ特別ですよぉ」

細川は下の方にフォルダをスクロール始めた。俺と林田、更には細川も鼻息を荒げ画面を注視した。

この下に一体何が待っているんだ……。

帰り道はすっかり薄暗い。いつも乗っているスクールバスの最終便をギリギリのところで逃して、こうして歩いて帰っている始末だ。

だが、なぜだろう。こんなにも足が軽やかなのは……。

答えは明白。

細川が見せてくれた黒沢ユリの写真のおかげだ。

勿体ぶって見せた細川の最終兵器は焦らされただけの価値があった。その内容を簡単に言えば、ユリのパンチラだ。

写真に写る、澄ました顔のユリは自分がパンツを撮られているなどとは気づいていない。綺麗な顔からは想像できない生々しい黒の下着。もう既に食い入る程目に焼き付いている。

細川はデータは渡さないの一点張りだったので、脳みその中で構築できるほど鮮明に記憶し、今もこうして忘れないように脳をフル回転させている。

俺が付き合えばユリのパンツを毎日見れる。毎日見られるどころか、匂いを嗅いだり触ったり、剥ぎ取って中の具材まで……。

考えていたら股間がむず痒い。

今日は最高のネタが手に入った。

ニャー。にゃーお。にゃにゃ。

ユリのパンツを思い出していたので唐突な猫の鳴き声に驚き、身体が震える。
前方を見ると黒猫がお腹を晒して寝転んでいた。
うおぉ、可愛いな。まあユリには負けるけど。
電柱が視界を遮り気づかなかったが、よく見れば女子高生が猫と戯れているようだ。
猫とJK。何とも映える組み合わせ。
まあユリとパンツに叶う組み合わせはないけどな。
段々と猫と女子高生との距離が縮まり、女の子の姿が鮮明に見えるようになってくる。
んー、綺麗なロングの髪、雰囲気、うちの制服……。何だかパンツにそっくり……。じゃなくてユリにそっくりだ。
女子高生に視線を合わせ続け、通り過ぎそうになった時、目が合った。　女子高生は目を見開き、俺は叫びそうになったのを必死で堪えた。

ー黒沢ユリだ。

間違いない。さっきまで俺の脳みそを支配していたユリがそこにいる。そして今も現実のユリが頭を支配している。

猫と戯れている。あのユリが。いつも澄ましてクールなユリが猫と戯れている。可愛過ぎる。

……これは本当に現実なのだろうか。

次の瞬間、ユリは立ち上がり、俺に背を向けた。

えっ。

そのままユリは足早にその場を去ってしまった。

あまりの出来事に俺は呆然と立ち尽すことしかできずにいた。　驚いて変な顔をしていた気がする。俺嫌われたのか？

いやそれよりもユリと会えた。しかも猫と戯れてるところを見れた。
でも逃げられた……。
喜んでいいのか悲しむべきなのか、頭の整理が追いつかない。
今日のユリは何色のパンツを履いてるのかなぁ。頭を支配するのはそんな思考ばかりだ。
足元の猫はゆったりと歩き、夜道に儚げな鳴き声を響かせた。

ユリとの遭遇疑惑もあり、俺はいつも以上にユリを意識してしまい、次の登校日、一切ユリを視界に捉えることができなかった。
休み時間に入ると謎の焦燥感に襲われた。
いつも一人で自分の席で弁当を食べていたが、今日はそんな気分じゃない。弁当を片手に俺は足早に教室を出た。

とはいえ教室以外で弁当を食べたことは殆どないので、こういう時に行く場所の当ては無い。

それに今の俺はユリの事で頭がいっぱいなんだ。普通、道端でクラスメイトに会ったら挨拶くらいするもんじゃないのか。なんでユリは逃げたんだ。

俺は既にそんなに嫌われているのーー。

「ちょっといい」

背後からの声に思考が崩れる。

あっ、と変な声が漏れ、振り返ると、そこには黒沢ユリが立っていた。

「ユリ……」

何でユリが俺に話しかけるんだ。昨日の解決もしてないのにこれ以上頭を混乱させないでくれ。いや、でもユリが俺に話しかけた。もしかして俺に興味があるのか。

「あっ、じゃない。黒沢……さん」

自分でも目で泳いでるのが分かる。
普通ならあり得ない距離で立っているユリの目は。吸い込まれる程に大きく、長いまつ毛が引き立つ。
呼吸が少し乱れているユリは、愚痴のように言った。「大山君、歩くの早い」
「え、あの、ごめん。いつもの感じで歩いてたつもりなんだけど」
何で謝ってるんだ俺、だせぇな……。
しかしユリは俺の謝罪など気に留めていない様だった。
「お昼。今日は教室で食べないの」
ユリは俺が弁当を持ってるのを見つけ、そんな質問をしてきた。どうやら俺はいつもぼっちでお昼をしているクラスメイトというイメージらしい。
「えっ、あー、今日は別の場所で食べたい気分だったから。とは言っても当ては無いんだけど」

最初のユリの視線を偶発的に見て以降、彼女に視線を合わせる事ことができない。緊張のピークに達している俺を尻目に、ユリはクールな表情を一切崩さない。

「それだったら私、良い場所知ってるから一緒に食べる？」

淡々とユリはそう言った。あまりに普通の会話のように発するので俺の脳は一度その言葉をスルーした。

えっ。ユリが俺を昼飯に誘っている。あの黒沢ユリが。

「えっと、あの、それはその。どういう……」

明らかにきょどっている俺に、呆れた様子のユリは、俺の制服の裾を掴み、小走りに廊下を歩き出した。

ユリの行動にどう対処していいのかもなんと返せばいいのかも分からず、俺は連れられるまま、足を動かした。

俺とユリという組み合わせが珍しいのか、ユリの存在が周りの目を引くのか、廊下を歩いている最中、付近の生徒は誰もがこちらを注視していた。俺は注目を集める事も、ましてや女子と二人きりで歩く事も慣れていない。何の汗か分からない汗が身体の至る所から分泌されていた。

普段、俺達が授業を受けるA・B棟校舎ではなく、少し離れたC棟校舎にたどり着いた。C棟の校舎は部室などがある建物で授業のある時間に生徒は殆ど足を踏み入れない。

ユリは一目散に空き教室の中に入り、ベランダの外に出た。

なぜ人目につかないところに移動したのだろう。というか何でユリは俺を連れて……。

まごつく俺を見て、ユリは手でこっちに来いと合図した。

「し、失礼します」

同級生への敬語で自分の緊張度合いが計れてしまう。

二人で横並びに座り、数秒の沈黙が流れた。校庭からは学生達の笑い声が鮮明に聞こえる。何と話しかけるべきなのか思案する俺を尻目に、ユリは潤った唇をゆっくりと動かした。

「大山康太君だよね。一年も同じクラスだった」

「えっと、うん、そう。大山康太。……黒沢さんはあの、その……」

何か気の利いた事を言おうとした瞬間、俺の腹が大きな音を鳴らした。あー、そういえば、朝ご飯を食べるのを忘れていた。

ユリは静かに笑った。

「取り敢えず、ご飯食べましょうか」

落ち着いた口調、綺麗な動作。同級生とは思えない。

俺といえば……。

お弁当を取り出すだけで手が震えてしまっている。

ユリは制服のポケットからチューブタイプのゼリー飲料を取り出して、飲み始めた。
「お、お昼それだけなの」
ユリは頷いた。
「学校って何だかお腹空かなくて。でも部活前にもう一回これ食べる。流石に身体が持たないから」
「それは食べるというか飲むでは……」というかきつい陸上部の練習をそんなゼリーでやり切るなんて。身体の作りまで違い過ぎる。
ユリが先にゼリーを飲み終え、手持ち無沙汰にしているので、俺は急いで弁当を箸でかき込んだ。そんな俺の姿を横目で見て、ユリは微笑んだ。
何だろう、良く分からないけど幸せだ……。
俺が弁当を食べ終えるのを見届けてからユリは息を吐き出した。
さっきまで落ち着いていたユリがどことなくソワソワと目を動かしている。

「それじゃあ、本題に入るけど……」
なんだユリから発せられるこの緊張感は。本題……。一体何を言うつもりなんだ。
待て。いきなり想定外の事を言われては冷静な対処ができない。ここは先手を打つんだ。その為には先を読む必要がある。つまりユリの思考を読む事だ。
授業中意外に話した事の無い俺を昼飯に誘い、人気の無い教室に連れて来た……。
まさか……。
黒沢ユリは俺に告白しようとしている。全ての要素はそこに終着するとしかーー。
「昨日、帰り道で会った……よね」
ユリの大きな瞳が揺れた。
「あ、猫と戯れてた時の」

「やっぱり。見てたのね」
「うん、見てた見てた。ぜーんぶ見てたよ。猫可愛かったよね。あー、勿論、黒沢さんもーー」
って俺は何を口走ってるんだ。
ゆっくりとユリの方に目をやると、なぜだか彼女の表情は固まっていた。
えっ、もしかして俺、引かれた。
そりゃそうだよな。自分で分かるくらいきょどってたし、夜道で会ってまるで不審者みたい。ダメだ。もう挽回できない。俺の青春はここで散るようだ。
次の瞬間、ユリは俺の手を握った。
表現できないようなきもい声が驚きと共に俺の口から発せられる。
「昨日の事は私達だけの秘密にして欲しいの。お願い」
俺の手を握る力が強まる。それに比例するように上目遣いでこちらを見るユリの表情が可愛さを増していく。

可愛すぎだろこの女……。
こんな風にお願いされたら承諾するしかないじゃないか。
「お願い。大山君」
小さい声でユリは言った。
俺は顔を背け、頷いた。「も、勿論。全然いいよ、それくらい」
ユリは目を瞬かせ、微笑んだ。
「本当……。良かった。ありがとう大山君」
もう限界だ。可愛すぎて俺の心臓が破裂しそうだ。
ユリはさぞ安堵したのか、息を何度か吐き出した。
んー。しかし妙だな。猫と戯れていたくらいで呼び出して、口封じまでするなんて……。

「それじゃあ教室に戻ろうか。いきなり連れ出してごめん。……できれば昨日の事は忘れて」
そう捨て台詞を吐いて、ユリはベランダから教室に戻ろうとする。
俺は咄嗟にユリの手を掴んで、それを阻止した。反射的な行動だった。
「どうしたの……」
俺だってどうしてそんな行動を取ったのか分からない。でも忘れてとい言われたら、せっかくできた繋がりが消えてしまう気がした。俺はこの一世一代のチャンスを逃したくなんかない。
「黙ってる条件があるんだけど、良いかな」
少しでも繋がりを保つ。それが俺の最善だ。
ユリの表情が少しだけ強張った。
「どうしたの急に。条件って……」
それはーー。

反射的な行動だったから何も考えていなかった。落ち着け康太。俺は最善の行動を選択するんだ。

ここは部室……。俺は映像部。そうだ。映像だ。

「俺、映像部でカメラの担当なんだけどさ。今次のコンクールに向けて映画を撮ってるんだ」まあ撮ってるのは先輩で俺達は部室で喋ってるだけだけど。

少しユリの表情が和らいだ。

「そうなんだ。凄いね映画を撮るなんて。それで大山君は私に何を……」

「被写体になって欲しいんだ。カメラの練習というかさ、今ここで何枚か撮らせてくれないかな」

言い終えるや否や、俺の心臓はかつてないスピードで鼓動した。これが断られたら終わりだ。頼む。了承してくれユリ……。

ユリは考える素振りを見せ、目線を落とした。

俺にはユリの思案の時間が永遠に感じられる。

「うん、分かった。条件を飲む。それで内緒にしてくれるなら」
ユリは静かに言った。俺の心は大きく叫び声をあげる。
始まった俺の青春。
「じゃ、じゃあ早速……」
そうだ。どうせなら一眼レフで撮ろう。考えるや否や教室を飛び出し、映像部の部室まで走って自分のカメラを取り、ユリのいる教室へ戻った。
「ビックリした。いきなり飛び出したから……。カメラを持ってきたのね」
「えっ、あーごめん。ちょっと慌ててた。取り敢えず一枚貰うね」
俺は乱れた息遣いのまま直立するユリの写真を撮った。
普通に撮っただけなのにまるで違う。被写体がいいとここまでカメラは楽しいのか。
「黒沢さん、教室を歩いてみて。自然な感じで」
「えっ……。分かった、やってみる」

猫と戯れたことが余程、出回って欲しくないらしい。やけに従順なユリは教室を歩き始めた。自然にと注文したがユリは少しぎこちない動作で歩いている。そこもまた可愛い。

それから俺は何枚かの写真を撮った。どれも被写体がユリというだけで完璧な写真だ。けれど俺の真の狙いはこの写真だけではない。

あの写真のー細川の撮ったユリのパンチラ写真の再現。あんな盗撮写真じゃない。ちょっとした皺、肌質、細やかな表情まで全て収めて、リアルなユリのパンチラ写真を手に入れる。

「時間も無いし、最後に一枚だけ貰っていいかな」

「どんなポーズ取ればいいの」

「椅子に腰掛けて。普段通りな感じで。……そこの本を読んでて」

教室に放置されていた本を手に取り、ユリに渡した。

ユリは無言で頷き、本をペラペラと捲り始める。

クラスのギャーギャー喚いている女共とは違う。ユリの読書姿には知性が感じられる。そんな彼女が今からパンツを撮られる痴態を晒す事を想像したら、股間が熱くなる。

机の下から覗くようにユリを捉える。本に目を通しているユリはこちらの動きをあまり気にかけてはいない。今がチャンスだ。シャッター速度、感度調整。画角確認。よし、この位置なら確実にパンツを捉えられるはずだ。

後はユリが足を少し開いた瞬間にシャッターを切る。

まだだ。焦るな。チャンスは必ず来る。

カチカチカチ。

静寂が訪れた教室に時計の針の音がこだまする。

「……大山君」

ユリが口を開いた瞬間、その時は訪れた。

シャッターを切り、二人の間に一瞬の閃光が走る。

……撮れた。
「ご、ごめん。間違えてフラッシュたいちゃった。眩しかったよね。俺は何をしてるんだか」
恐ろしいほど早口で弁明をした。ずっと動揺していたおかげかユリは不審に思わず、ただのミスだと納得したらしい。
「引き止めてごめんね。そろそろ教室戻ろうか」
焦りからか俺は自らユリとの時間を終わらせる発言をした。ユリがそれを引き止めてくれるはずもなく、「そうね」と扉に向けて歩き始めた。
「さっきの写真だけど、良いのがあったら送ってもらったりできる？」
さっきの写真ってユリのパンチラの……。
「無理無理、それは厳しい！」
あまりの慌てっぷりにユリはきょとんとしている。
「そう、残念。綺麗に撮れていたと思ったから」

あ、そうだ。俺はユリの普通の写真を撮っていたんだ。何もパンチラ写真がバレたわけじゃない。

「いや、無理っていうのは黒沢さんの連絡先を知らないから送れないなあという意味であって、深い意味は……」

ユリはスマホを操作し、こちらに液晶画面を提示した。黒い斑点模様が俺の目に映った。

「連絡先、知ってれば送ってくれるんでしょ」

「えっ……」

これって連絡先交換できるって事？

あの黒沢ユリと。

俺は無心でスマホを操作してユリと連絡先を交換した。

口ごもる俺を尻目にユリはいつものクールな表情で呟いた。

「写真、楽しみにしてる」

最後にちらりと笑みを覗かせ、ユリは軽やかに人気のない廊下を歩いて行く。
その優雅な背を見て、俺は恋以上の強い昂りを覚えた。

次の日、軽い足取りで映像部の部室に入った。今日も先輩達は映画の撮影で学校の外で活動している。よって部室は映像部トリオが今日も独占している。
鼻歌混じりに何時もの席に座ると、細川は冷ややかな視線をこちらに送って来た。
「随分とご機嫌ですねぇ大山」
「そうか。普通だよ、普通」
林田も俺の変化に気づいたらしく、スマホの操作を止めて会話に入ってきた。
「大山君いつもより声のトーンが高いよ」

「だから普通だってふつー。まあちょっとだけラッキーな事があっただけ」
よしいいぞ、二人共。もっと詰めろ。
昨日、俺はユリと知り合い連絡先を交換した。こんなにも浮かれられる事はない。だがそれを自分から話して自慢するのはださ過ぎる。だから俺に無理やり言せるんだ。
「どうせしょうもない事でしょう。取り合わないに限りますよ」
細川が冷めた対応で話を終わらせた。
いや、終わらせられては困る。
「興味なさ過ぎだろ。てかしょうもなくねぇよ、舐めんな。少なくとも、細川のくだらない盗撮写真よりはくだらなくないね」
くだらないという台詞にカチンと来たのか、細川はメガネを勢いよく動かした。

「この前はあんなに興奮して見せてくれとお願いして来たのに随分ですねぇ。それじゃあ聞かせて貰いましょうか、素晴らしい報告を。くだらない報告だったら二度と盗撮写真は見せませんよぉ」

盗撮写真？　痛くも痒くもない。俺はこれから好きな時にユリの写真を堂々と撮れるようになるのだから。

不穏な空気に相変わらず林田はオロオロと視線を動かしている。

「それじゃあ単刀直入に言うぜ。俺は黒沢ユリと友達になって、連絡先を交換した」

阿鼻叫喚……かと思いきや、声が出ないほど驚いてしまっているようだ。

「嘘で誤魔化すなんて哀れですねぇ」

……。

どうやら現実を受け止めきれないらしい。仕方ない、見せてやるか。

スマホを操作して、交換したユリの連絡先を見せてやった。

捻くれている細川はまだ信用していないらしく「どうせクラスのグループから無理やり追加しただけでしょう」と反撃してくる。
悪いがそもそも俺はクラスのグループに招待されていない。まあそんな話をしてもどうせ屁理屈を言われるだけだ。ここは奥の手を使うか。
「くくく……」
「何が可笑しいの、大山君……」
「いや、画質の悪い盗撮写真で満足している哀れな眼鏡が可哀想に思えてな」
細川は直ぐに俺を睨みつけてきた。
「何をウダウダ言ってんですか。馬鹿にするならボクの撮ったのより抜ける写真を見せてみろ」
あの写真を出すか……。ユリの写真を見せて貰った恩もあるし、何より証拠を出さないと細川がぐちぐちと文句を言い続けるだろう。
「見せてやるよ。とっておきの一枚をな」

スマホのお気に入りフォルダから一枚の写真を開き、勢いよく二人に提示した。

椅子に座り込み、本に視線を向ける黒沢ユリ。きめ細やかな長い髪、制服の上からでも分かるスレンダーな身体。高画質カメラは、写し出した少女の身体の隅々までを見逃さず描写する。

しみひとつない健康的な肌、程よく筋肉のついた脹脛まで鮮明に映り込む。

そしてフラッシュにより暴かれたスカートの中の少女の痴態。それすらもカメラは鮮明に写し出してしまう。

たかれたフラッシュは開いたスカートの隙間を躊躇なく照らす。見えないはずの太ももが顔を覗かせ、その質感をも視認させてしまう。そしてその更に奥深く、深淵なる部分さえも……。

スカートの中に映り込む、紺色の生地、そのクロッチ部分。

「こんな高画質のパンツを見た事があんのか、細川」

細川は悔しそうに歯軋りをする。
「ぐぬぬ、生意気ですよぉ……」
粗探しをしたいのか、写真を隅々まで見ている細川。だがその身体は正直だった。細川の股間はモリモリと膨らみが増していく。そして一部始終を見ていた林田の股間も呼応するように股間を大きくする。そして俺の股間も自ずと……。
「凄いよ大山君、あの盗撮写真とは比べ物にならないエロさ、生々しさだよ」
林田は鼻息を荒くし、制服のズボンのチャックを下げ、パンツの上から股間を撫でている。
「は、林田……」
あまりのエロさに林田は性欲を留めておけないようだ。さすがはユリ。
温厚な林田にも写真を侮辱され、細川は怒りを露わにした。まじまじと写真を見て、細川は鼻を鳴らす。

「よく見てみろです。この紺色の布はパンツじゃなくて陸上部の時に着てる練習着です。多少際どくはありますが、所詮は見せパン。これはパンツじゃない」

拳を握り、細川は唾を飛ばしながら豪語する。

ぐぬぬ、確かにこれはパンツじゃない可能性が高い。あの日の放課後は陸上部の部活があったのも事実。

だが負けるわけにはいかない。

「盗撮とは画質もエロさもまるで違う。そんなのは屁理屈だ」

その反論に更に細川は言葉を返す。

俺達の討論は更にヒートアップしていくー。

「シャラップ！」

一際大きな声を発したのは俺でも細川でもなく、林田だった。

「パンツかパンツじゃないかじゃない。抜けるか抜けないかで語れ。話はそれからだ」

そう言った林田はパンツを下ろし、逞しい肉棒を露出させた。
林田の言葉で俺と細川ははっとし我に帰る。一体何を言い争ってたんだ俺達は。極上のオカズがそこにある。そんな最高の瞬間を見逃そうとしていたなんて。すまない林田。俺達が間違っていた。
俺と細川は共同作業で瞬時にユリの写真をプロジェクターに投影させる。そして同時に陰部を露出させた。
これで準備はOKだ。
林田は食い入るように写真を見て、ユリと何度も名前を呟いている。
「盗撮されて、太腿の付け根まで晒されて、こうしてみんなに見られながらオナニーのネタにされてる気分はどうユリ。いつも良い匂いを漂わせてる君でも部活終わりはやっぱり臭いのかなぁ、靴下の匂いを嗅がせてよ。どうせパンツも濡れてるんだろ？」
林田は饒舌に言葉を紡ぎ、ユリの写真で妄想しながら手を加速させている。

その実況で俺の肉棒は更に大きさを増していく。
「すげぇ、こんなに大きくなるの初めてだ。興奮する」
「ユリは最高のオカズですねぇ。精子が枯れるまでボク達にシコられてくださいよぉ」
三人の手が加速する。
ユリに向けられた三本の肉棒。我慢汁でテカリを増したそれは、同時に絶頂の時を迎える。
肉棒は鼓動し亀頭を膨張させる。ついに先っぽから白い液体が噴射し、淫靡な液体はユリの身体、顔、足に向けて放たれた。
プロジェクターに投影されたユリの身体が三人の精子で汚れていく……。
俺達は同時にその場に倒れ込み、息を荒くした。
「俺、こんなに興奮するオナニー初めてだよ」
「同じくですよぉ」

「僕もだよ」
倒れたまま見つめ合い、三人で熱い握手を交わした。
「これでユリはボク達のオナペット。せいぜい性処理道具として使われてくださいねぇ」
細川が聞き慣れない言葉を発した。
「オナペット？」
「おかずを提供する家畜ですよ。ユリはまさにそれです」
説明を聞いて林田が目を輝かせる。
「オナペットか、良い響きだね」
オナペット……。
あれ……。俺ってユリと付き合いたいんじゃなかったっけ。
林田が思い出したかのように大きな声を発した。

「まずいよグリーンバックに精子が。先輩達が帰って来るかもしれないから、直ぐ吹かなきゃ」

俺と細川は反射的に立ち上がり、オナニーの疲れなど忘れ、素早くパンツを吐き直した。部室でシコってるのがバレたらもう映像部にも、ましてや学校にもいられなくなる。

テキパキと掃除の準備を始める俺と細川だったが、林田の肉棒はもう一度、大きさを取り戻していた。

「白濁の液体に汚されたユリ……。あー、興奮するよぉ」

もう一度、林田の手が動き出してしまった……。

その日の帰り道、俺の頭は混乱していた。

なんなのだろうか、このモヤモヤは。

第一に、俺はユリと付き合うのが目的のはずだ。なのに俺だけの特別な写真をプライドの為に晒した……。

正直、それは細川を見返したかったのもある。けどおかしいのは、二人にユリをネタに目の前でシコられて嫌な気分じゃなかった事。それどころか俺の股間が反応した。普通、彼女を性的な目で見られたら嫌なんじゃないのか……。

なのに林田にユリの卑猥な妄想をされて、俺は少なからず興奮したんだ。

くそ。なんなんだよこの感覚は。

性的な目で見ないって決めたのに。俺は弱い。弱すぎる……。

だけど彼女にしたい思いが消えたわけじゃない。俺はユリと連絡先を交換したんだ。写真を口実にもう一回話す事だってできる。

俺の青春は終わっちゃいない。

あれから数日が経過した。何度ユリにメッセージを送ろうとしても、手が震えて送信ボタンが押せない。

本当にこれでいいのか、この文章一つで明るい未来が消え去るかもしれない。

そう思うと……。

ユリとも微妙な距離感が続いている。すれ違っても今まで以上の緊張から目は合わせられないし、会話も今まで通り何もない。もしかしたらあの昼休みは撮影会は嘘だったんじゃないかと錯覚までしてしまう。

でも嘘じゃないんだ。俺はユリの写真を見て、毎日自慰行為をしているのだから。

しかしいくら考えても良い案が思いつかない。

心許ないけど今日の部活で細川と林田に相談でもしてみるか……。

……いやだめだ。

今日は学校の都合で部活が全て休み。生徒は授業が終わり次第即帰宅になるのだ。

なんと間の悪い。

という事は今日はユリも部活は休みか。陸上部姿のユリを拝む事もできない。

まてよ。

これは好機なんじゃないのか。

ユリを放課後、ご飯に誘って写真の話をする。それで仲良くなって、なんやかんやあって、距離を縮めてあわよくば付き合う。

ありだろこの作戦。

早速、スマホを取り出してメッセージを打ち込む。

『この前撮った写真　何枚か良いのがあったから放課後ご飯でも食べながら見せたいんだけど。どうかな？笑』

もう何も考えない。考えたところで躊躇するだけだ。後は流れに身を任せるのみ。

思考を止めてそのメッセージを送った。途端に汗が吹き出たのは言うまでもない。そして鼓動が早くなり、返信が来ない事への苛立ちを覚えた頃。

『ピロリン』

と、携帯が音を鳴らした。

来たーーーー！

『いいよ』

返信はユリらしい淡白なものだった。それでも嬉しいのが恋というやつだ。

早速、近くのハンバーガー屋でどうかと提案するメッセージを送った。

すると黒猫のOKのスタンプと『お店の中で待ち合わせにしよ』とメッセージが返ってきた。

スタンプも返信も可愛すぎるだろ。つか始まり過ぎ俺の青春！

放課後、俺は爆速で帰路に着き、待ち合わせのハンバーガー屋に入店した。いつも頼むセットを注文し、空いてる二人掛けのテーブルに座った。

何もしていないと暴れ出しそうな程の緊張で、爆速でポテトを食べながらコーラを飲み干す。

ドリンクのおかわりを頼もうかと考えていると、目の前の椅子が動いた。

そこにはドリンクを手にした黒沢ユリがいた。

「えっ、あ……。どうぞ座って」

「うん、ありがと。そっちから誘ったのになんで緊張してるの」

「えっと……。女の子とご飯って初めてだから」

そうなんだ。とそっけない返事をしたユリは、腰掛けて緑茶と思わしきドリンクを飲んだ。

微妙な時間が流れる。俺とした事が話す内容も何も考えずに来てしまった。何とか世間話でもして場を持たせないと。

「黒沢さんは猫が好きなの」

ユリは一瞬、神妙な顔をして、そうだよ、と短く反応した。それからも陸上部の話とか先生の話とか色々振ってみたが、ユリの反応はどれも薄い。流石はクールビューティー・黒沢ユリ。

俺の弾が切れたところで、初めてユリの方から口を開いた。

「そろそろ撮ってくれた写真見せてよ」

できれば写真は最後にとっておきたかった。その話題が無くなると俺達がここに残る理由がないからだ。

でも、もう見せるしかない。

スマホを操作してユリに見せられる写真だけを厳選したフォルダを開いた。スマホごとユリに渡して、彼女の反応を待つ。

「……どうかな」
ユリはまじまじと写真を眺め、何度か横にスワイプした。
「……上手」
ユリの呟いた言葉を掬い上げ、何度も頭の中で反芻させる。
今、黒沢ユリに褒められた。
全身に熱が帯びるのが分かる。
「写真、勉強したの？」
調子に乗らず、冷静に答えようと、大きく息を吐き出す。
「父親がカメラマンでさ、そんで子供の頃から触ってたくらいだよ」
「お父さん、凄いカメラマンなんだ」
「凄いって程じゃないけど、映画のポスター写真とか撮ったりとか。最近だとあれ……」
パッと思いついた最近話題の邦画のタイトルを口にした。

ユリは驚いた表情こそ見せなかったが、関心を示すように頷いた。
「その映画、部活の後輩がいつも話題に出してる。本当に凄いんだね、あなたのお父さん。それに大山君の才能も」
俺がこんなにもユリに褒められる世界線があるのか。
表情筋を動かさないように意識していたはずなのに、にんまりと口角が上がってしまう。
「そ、それほどでもないよ」
俺の顔を一瞥して、ユリが苦笑する。余程、変な顔をしていたらしい。
「大山君は映画とか詳しいの」
俺は流行りの映画とアニメ映画くらいしか見ない。後は子供の頃に父親に見せられた名作と言われる洋画くらい。とはいえ無知だと思われても好感度が下がってしまうかもしれない。ここは適当に肯定しておくとする。
「詳しいって程じゃないけど。父親に色々見せられたりはしてたかな」

まあこれも嘘ではないし。

「英才教育ね。私もアカデミー賞取った作品くらいは全部見たけど……」

それからユリは映画トークを始め、俺は父親に見せられた作品のうろ覚えの知識、知ったかぶりで何とかその場を乗り切った。

いつもクールで気品に溢れるユリが饒舌に映画の話をしている。そんな姿を見るだけで幸せだ。俺は確かにそう感じた。

ユリをズリネタにした事がなんと愚かな行為だったのか。

もう俺はユリでオナニーはしない。あの二人にも止めさせよう。俺がするのは独りよがりのオナニーじゃなくて、ユリとの濃密なセックスなのだから。

話しているうちにいつの間にか外が薄暗くなり、雨でも降りそうな曇り空になっていた。今日は雨が降るなんて天気予報でもやってなかったのに。

ユリも同じ事を考えていたのか、ボッーと外を眺めてから「そろそろ帰りましょうか」と呟いた。そうして店を出て、帰りの方向が一緒というのもあり、成り行きで二人で帰路に着くことになった。

誰かと離れてしまうのが、寂しいと感じるのは初めてだ。

さっきまでの会話の流れが打ち切られ、また俺達の間には微妙な沈黙が流れている。

このまま歩き続ければ家に帰って、それで終わり。もう俺がユリを誘う建前は無い。あんなに楽しそうなユリをもう見れないかもしれない。

本当にいいのかそれで。

ユリだって本当は俺といたいんじゃないのか。

ーーここで終わらせたくない。

気づいたら俺の足は止まっていた。
少し遅れてユリは足を止め、振り返った。
「どうしたの大山君」
「……ユリ」
名前を呼ばれてもユリは表情を崩さず、俺の方を見つめ続けた。
このアスファルト、薄暗い雰囲気、あの電柱。よく考えれば、猫と戯れていたユリと運命の出会いをした場所にそっくりじゃないか。
神様はなんてお膳立てをしてくれるんだ。
もう行ける気しかしない。
これから起きる世紀の告白に備え、大きく息を吐き出す。
「俺は初めてユリに会った日から、この出会いは運命だと思ってた。こんなに興味を惹かれて、はっきりと好きだと思える相手は生まれて初めてだ。あの日、ここに似た場所で出会ったのも全部、神様が引き合わせてくれたんだと思う。俺と

話してる時のユリは学校にいるクールな黒沢ユリとは違う。どこか無邪気で普通の女子高生。俺だけがそんな君の笑顔を引き出せると思うんだ。だからーー俺と付き合ってくれないか」

今までで一番長い沈黙が流れた。

ユリは俯きながら、首を振った。

小さな雨粒が俺の手に触れた。

「ごめんなさい。大山君とは付き合えない。いいえ、今は誰とも付き合う気はないの。部活で精一杯だし、引退したら受験もある。貴方はとても良い人だと思う。カメラの才能もある。きっと私より良い人が見つかると思う。……ごめんなさい」

ユリの言葉が上手く頭に入らない。え、何。俺は今振られたの。これどういう状況。だってあんなに楽しそうにしてたじゃん。あの笑顔は全部嘘だったってこ

と？　なら放課後に一緒にご飯食べたりすんなよ。思わせぶりな態度とってんじゃねぇよ。

「雨強くなりそうだから、私はもう行くね。大山君も早く帰ってね。……それじゃあ」

ユリが背を向けた。

え、本当に帰るの。ねえ、ユリ。

ユリの背中が段々小さくなっていく。視界は薄暗く閉ざされた。

大粒の雨が何度も俺の頭を叩いた。

ユリはもういない。そう思うと動悸がして、身体が苛立つ。

気づけば俺は走り出して、叫んでいた。

大きな雨粒も周りの目も何も気にならない。この世界に絶望した俺は、訳のわからない言葉を叫び続ける事しかできなかった。

あの女ふざけんな。ていうか早く帰ってねって何だよ。大失恋した奴がさっさと家に帰れるわけねえだろ。デリカシーもねえのかよ。クソが。

今は付き合う気ないとか言ってたけど本当はもう彼氏いるんだろ。毎日、セックスして喘いでんだろ。

ズリネタに使わないって思ったけど、お前なんか精子を搾り取る以外に使い道ねえよ。

近くにいたら良い匂いがすると思ったけど、写真のパンツは臭そうなメスの匂いしかしねぇしよ。

あー、クソが。

あらゆる心の叫びが漏れ、俺の中で何かが弾けた。

ユリは俺の事を気持ち悪い奴だと認識してる。明日、学校に行ったらクラスメイトにきもいやつだと触れ回る可能性が高い。そうなったら彼女どころか、高校生活は終わる。

そんな事させるわけにはいかない。
復讐だ。
俺に舐めた態度をとったユリにーーあの女に復讐してやる。

あの日から俺の生活は大きく変わった。映像部に顔を出す回数も減り、やる事といえばユリのストーキング行為。
陸上部の活動が終わるまでユリの身辺調査、部活が終われば後を着けて就寝まで家の近くを観察。
そんな生活を続けて十日が過ぎた。
なぜこんな事を始めたのか。理由は単純だ。
黒沢ユリを脅迫するためだ。
俺がユリの写真を撮るきっかけができたのは、ユリが猫と戯れているところに居合わせたからだ。ユリはその姿を他人に知られたくないと感じ、俺に口止めを

した。つまり、それ以上のユリの痴態を抑えれば、ユリを強請り、写真以上の見返りを得る事ができる。

ストーキングされているとは知らないユリの自然な写真。この行為を続けるだけで興奮が抑えられない。そしてその先にストーキング以上の興奮が待っている。

ストーキングを始めて十一日目。

その日の夜、黒沢家の玄関を張っていると、ユリの父親と母親、兄貴らしき三人組が大きな荷物を持って出ていく姿を発見した。

恐らくユリ以外の三人で遠出でもするのだろう。つまり今はユリが家に一人。忍び込んで襲うか……。

いや早るな。

何かスキャンダルの匂いがする。ユリは何かぼろを出すはずだ。

それから数時間が過ぎたが、何も変化はない。あまり遅くなり過ぎると親も心配するし、何より人通りが減り目立つ。

仕方ない。今日は終わりにするか。

……仕掛けをしてからだけど。

一週間ぶりに映像部に顔を出すと、相変わらず部室には陰気な二人組、細川と林田が居た。

「最近、あまり顔を出しませんがどうしたんですかぁ。まあどうせ黒沢ユリに振られたってとこでしょうけど」

細川は得意な嫌味を披露する。

まあ今の俺には痛くも痒くもない。

「黙ってユリの写真でオナニーしてれば良かったんですよ。こんな上質なオナペットは他にいないんですからねぇ」

どうやら細川と林田はまだユリの写真で自慰行為に興じているらしい。
ここで哀れんでも細川に目くじらを立てられるだけか。
「悪いけど写真でオナニーはもう飽きたんだよ。んじゃ俺はこの後、予定があるから」
「何か今日変だよ大山君」
いつも細川に煽られて喧嘩していいか、林田は疑いの視線を向けて来た。
「この前、黒沢さんと連絡先交換したって言ってたよね。もしかして……」
おいおい、林田まで俺を弄ってくる気かよ。
「黒沢さんのエッチな写真をまたゲットしたんでしょ。あれで抜き飽きたところだったんだよ。オカズになるのがあるんだったら分けてよ、大山君」
林田は本当に欲望に忠実なやつだ……。
まあ丁度いいか。
「ゲットできたら分けてやるから、楽しみに待ってな」

去り際に手を振り、部室を後にする。

部活で移動を終えた後の教室は蛻の殻だった。普段は授業で使う教室だが、放課後になれば人の気配も無い。

黒沢ユリは大山から大事な話があるとメッセージを受け、一人、教室にやって来た。

まだ教室に大山の姿はない。

一体何の用件なのか。心当たりがあるとすれば、先日の告白の件だろうか。

とはいえユリの気持ちが変わる事はない。早く済ませて部活動に間に合わせなければ。ユリの考えといえばそれだけだった。

ユリの到着から少しして、教室の扉は開いた。

勿論、現れたのは大山康太。
「約束通りきてくれたんだね」
「大事な用事ってなに。これから部活だから急いでいるんだけど」
普段は冷静なユリだが時間に急かされ、少し苛立っている。
「まあまあそう焦らないでよ。俺の用件は一つだけ」
以前、ユリが会った時と大山の様子はまるで違った。たどたどしい喋りも、落ち着かない目線も、今の大山には存在しない。まるで何かが吹っ切れたように堂々とした立ち振る舞いでそこに立っている。
そのおかげか自信なさげな以前の大山よりも勇ましく、見た目も少しばかり良く映っている。
「告白の答えをやり直せ。ただそれだけ」
以前の温和な雰囲気の大山とはまるで違う、強い口調。

しかし男に強気な態度を取られたくらいで怯むユリではなかった。寧ろあれだけ丁寧に断ったのにこんなにも傲慢な態度が取れる事に呆れてしまう。才能があってその上、謙虚な優しい人間だと思っていたのに、少し残念だ。

ユリは息を吐く。

「残念だけど答えは変わらない。貴方には特別な才能があるし、優しい人だから。きっと良い人が見つかると思う」

前と同じ解答を大山は鼻で笑った。

「俺にははぐらかしてる様にしか聞こえないよ。なあ、理由があるならちゃんと言ってくれよ。もう恋人でもいるのか？　それともユリには好きな人でもいるのか？」

その瞬間、ユリは自分でも分かる程に心臓が動悸を早めた。

しかしユリの表情は崩れない。いつも通りのポーカーフェイス。

このままはぐらかしてもいいが、大山がこのまま粘着を続けるとなれば、そちらの方が厄介だ。多少は現実を突きつけて、諦めてもらう方が得策かもしれない。

ユリは気持ちを固めゆっくりと口を開いた。

「そう。貴方の言う通り、好きな人がいるの。だから気持ちには答えられな……」

その瞬間、大山は憎悪の含んだ笑顔を覗かせ、ユリを見つめていた。異様な大山の表情を見て、ユリの全身に寒気が奔る。

大山への恐怖心なのか驚きのせいなのか、大山がポケットから機械を取り出しボタンを押す一連の動作をユリはボッーと眺めていた。

しかし呆気に取られていたユリの意識は直ぐに戻り、代わりに動揺だけが全身を蝕む。

『あはんっ……ダメェ、気持ちいい／／　あんっ……もっとしてぇ、気持ちいいの／／』
「……止めて」
『……好きなの／／　ユリ好きなの／／　んむぅ、あんっ……。気持ちいいの好きなのぉ！』
「お願いだから止めて！」
「私、海斗の事が大好きなの！　ダメな妹なのぉ！　あんっ、ちゅき、ちゅきぃ……気持ちい／／』
全身の力が抜け、ユリはその場にヘタレ込んだ。身体中の血が抜けたような感覚を覚え、色白の顔は青ざめる。
「まさか学園のマドンナでいつも澄ました顔をしてる黒沢ユリが、こんな下品なオナニーする変態だったとはなぁ」

放心状態のユリの頭に、大山の言葉は入って来ない。それでもBGMのように鳴る、自身のオナニーの音だけは鮮明に鼓膜を支配してしまう。
音声のユリは自慰行為に夢中になり、吐息を出しながら、濡れたま×この音を盛大にかき鳴らしている。
『クチュ、グチュ……クチュチュッ……グチョッ』
教室に自慰行為の音が響いた。
怯え、絶望したユリの表情を見て大山はケタケタと笑い声を上げる。
「お前に騙されてその気にさせられて、失恋したあの日。あの日から俺はお前に復讐することだけを考えてた。毎日、毎日、お前の後を着けて行動を観察した」
大山はユリの周りをゆっくりと歩く。
「そしたらある日、お前以外の家族全員が大きな荷物を持って家を出た。……その日、俺の人生が変わる気がしたんだよ」

大山はユリに近づき、舐めるように怯えた表情を観察した。
「そうだよ、その表情が見たかったんだ。俺と同じ絶望した表情。全てを持ってるユリを堕とせるなんて、こんな快楽ないよ」
咳払いをした大山は、また落ち着いた口調で語り始めた。
「俺は何かを得られる気がして、ユリの部屋の窓の外にこれを設置した」
大山は自慰行為の音が流れるボイスレコーダーを見せる。
「そしたらビンゴ。まさかこんな音声が録れるなんてなぁ。これで何回オナニーしたか、お前の盗撮写真を見ながらしたら、精子が止まんなかったよ」
「……クズ」
やっとの思いで絞り出した言葉を、大山は笑って一蹴する。
「家に一人になってテンション上がって、窓を開けながらオナニーしちゃったの？　誰かに聞いて欲しかったのか？　まああの声量じゃあ閉めてても丸聞こえ

か！　近所の奴等には、澄まし顔のスケベ女子高生が住んでると思われてんだろうなぁ！」

「違う！　暑くて、窓を開けてたのを忘れて……」

ユリは言い淀む。何の弁解をしてるんだ。これじゃあ自慰行為をしたのを肯定するようなものではないか。

「まあいいや。お前にラストチャンスやるよ。俺と付き合うかどうか。いや、違うな。付き合ってやるよユリ」

ユリは大山を睨みつけた。

頭でも大山を煽るのは都合が悪いと分かっていた。それでも、プライドが大山を許さなかった。

「誰が貴方なんかと。願い下げよ」

負の感情に溢れたユリの言葉を聞いて、大山は鼻を鳴らす。

「そうだな。恋人ってのはお互い好き同士じゃなきゃいけない。クズだと思っている相手と無理に付き合うのは相手にも失礼ってもんだ。うん、分かったよ。……ところでユリの好きな相手って誰なんだっけ」

蛇のような生暖かい視線をユリに向けた。

それと同時にボイスレコーダーの音量を上げる。

『好き♡　あんっ、すきぃ♡　気持ちいいよぉ、海斗♡　もっとしてぇ、もっと気持ちいことして……　あんっ、すきぃ、ちゅき♡　いくっ、イクッ……わたぃイッちゃうよ……ちょーだい≫　海斗のちょうだい♡　イクッ、好き、海斗、カイトォ……好きぃ！……うっ≫　……はぁ、はぁ。……海斗ぉ』

羞恥心と恐怖心に苛まれ、ユリは手で顔を覆った。

「あー、この海斗って人の事が好きなのか。でも海斗って誰だ？　海斗、海斗……海斗！」

「もう辞めてよ」

震える声でユリは言った。しかし今更、大山が止まるわけがない。
「あー思い出した！」白々しく大山が大きな声を出す。「去年、うちの学校で生徒会長をやってた黒沢海斗先輩だ！　ユリは年上が好きだったんだな。でも、もう卒業してるから付き合うのは難しいんじゃ……。って待てよ！　黒沢ってユリと苗字一緒じゃん。え、まさかとは思うけど……」
大山は笑みを浮かべる。
「ユリは、自分の兄貴でオナニーする変態だったの！？」
残酷な現実を突きつけられ、クールでいつも冷静なユリの鎧が綻ぶ。自然と目から涙が溢れた。
涙を流すユリを見て、大山は快感と性欲が湧き上がり、股間が膨れ上がるのを感じる。
「いいから、もう何でもいいからその音声を渡して。お願い」
「ダメだよ、バーカ」

さっきまでの演技は終わり、大山の声は無機質で冷徹なものに変わった。その瞬間、ユリは自分が逃げられない事を察してしまう。

「もしこの音声が学校で流れた黒沢ユリのイメージはどうなるかなぁ。もし兄貴の通う大学で流れたら兄貴の立場はどうなるのかなぁ。……もしお前の家で流したら？　家庭崩壊しちゃうかもなぁ」

ユリは絶望と同時に、自分が犯した過ちの責任を、自分で取らなければという責任感が芽生える。

……兄に迷惑はかけられない。

ユリは反射的に大山の手を掴み懇願した。

「お願い。それだけは辞めて。家族に迷惑はかけたくない。貴方の恋人でも何でもなるから、お願い」

違う、そうじゃない。ユリは舌を噛み切りたい思いを必死で抑え、口を開いた。

「……大山君の恋人にしてください」
自分に陥落し、許しを請うようにお願いまでするユリを見て、大山は勝利を確信する。
「は？　何で俺がお前みたいな変態女と」
大山はユリの腕を振り解く。
よろめき、ユリは姿勢を崩した。
「じゃあ、どうしたらいいの……」
「そんなの簡単だろ。俺の言うことを聞けばいいんだよ」
「言うこと……？」
「俺の命令通りに動けばいいの。そうだな。もし今日一日、俺の思い通りに動くならこのボイスレコーダーの音声を消してやる。うん、そうしよう」
音声を消す。その可能性があるなら、どんな提案でも飲み込むしかない。ユリは頷く。

「分かった。本当に消してくれるなら、言うことを聞く。……何をすればいいの」
大山は近くの椅子に座り、大きく足を広げて座り込んだ。
「俺のち×こ舐めろ。先ずはそれからだ」
卑猥な命令をされる。その可能性を考えていなかったわけではない。それでもいざ命令されると、嫌でも身体が竦む。こんな獣のペニスを舐めなければならない。考えただけで吐き気を催す。命令を聞くと決めたはずなのに、ユリの身体は直ぐには動かなかった。
「教室でフェラなんて普通嫌だよな。悪かったよ、やっぱりいいや」
「え……」
「俺も気が長い方じゃないからさ……。ほら、ユリ部活が始まるから急いでるんだろ？　もう部活の始まりには間に合わないかもしれないけど、まだ言い訳できる時間なんじゃないか。ほら、行っていいぞ」

黒沢ユリはゆっくりと立ち上がり、大山に歩み寄る。
そして大山の前に跪き、制服のチャックを下げて、男性用下着の中から肥大化したペニスを露出させた。

続きは製品版で